

新春座談会

「大学の現状について」

司会・あけましておめでとうございます。

理事長、学長の新体制になって、大学の方向性もより具体的な局面を迎えていると思います。そこで、まず理事長先生、そして昨年新たに就任されました学長先生に、今後の指針、展望などについてお聞かせ頂きたいと思います。

理事長・昨年予算会議を行い、歳出の10%のカットを目標にし、出来るだけそれに近付けるよう努力し、どうしても駄目なら人件費を削減することにしたいと考えています。人件費は歳出の70%を占め、歯科大学ではずば抜けて高い。他校は50%程度。平成19年度に人事院勧告が出る。これを機会に、公務員のベースに準ずる、という本来の形に立ち返りたい。しばらくはそれでいけると思います。

会長・他大学との差は、他に何かあるのでしょうか。教員の人数が多い、という以外に。

理事長・年度赤で20人退職しますが、2億円の節約になる。センターの収支で1億円黒字、計3億円が浮く形になる。後は経費を下げるだけ。かつて公務員の給与が変動した時に、うちは固定したままだったため、そこに差ができたまま、現在に至っている。公務員に合わせると実質的に給与引き下げになるので、当面は特別賞与などで補填し、段階的に合わせてゆきたいと思います。

「教育の改革について」

司会・在校生のカリキュラムの変更などについて、学長先生、いかがでしょう。

学長・すでに平成17年度から、新カリキュラムに入っています。平成18年度から導入される共用試験に備えるためですが、国家試験に対処するには、6年生の補講だけでは対応しきれないことがはっきりしてきました。今年度の国試の結果を見ながら、少しずつでも改良してゆきたいと思っています。

す。また、教員の学生教育に対する考え方を改める必要もあります。従来大学は学問中心、学生は自学自習が前提でした。しかし、大学がエリートに対する教育から、より大衆的な在り方へと変化している中で、学問を学ぶというよりも社会に出て役に立つ知識・技術を求める学生達に、きちんと対応しなければなりません。それに応じた教育をするためには、大学から各教室に具体的に教育内容を依頼していかなければなりません。60%はモデルコアカリキュラムが占め、残り40%は、大学独自の特色ある教育をしてゆきたいと思っています。

司会・共用試験などでは、本学のレベルがはっきり分かるのでは……。

学長・過去3回行われたトライアルでは、本学学生の成績は正答率6割を切る程度です。私学の学生の学力自体には大差がないとすれば、学生自身の意識の問題、さらには教員の対応の仕方、これを改善すれば良いと思います。

学長・その通りだと思います。国家試験などでは、従来各教室の講座に補講を依頼していましたが、昨年からは国試対策委員会で検討し、好評な講師に直接補講を依頼するようにしました。教員の意識も改善してきていると思います。

「国家試験対策について」

司会・臨床と座学の教授を分ける、などの能力に





応じた対応も必要かと思えます。教員削減と平行して、特色ある新たな教員の採用なども、本学の改善につながるのでは。

学長・財政が許せば検討したいですね。

会長・父母会の会長がこのような座談会に出席されるのは初めてのことと思えます。大学に寄せる率直な思いをお聞かせ下さい。

父母会会長・父母会の役割としては、まず学生のために父母が出来る支援をする、同時に大学のためにも出来ることがあれば協力する、という二本柱があると思えます。具体的な活動提要是会則にある通りですが、まだ出来て日の浅い組織なので、これから土台を固めて発展しなければなりません。過去2年の実績から、国家試験に対して父母会役員の中にも不安が広がっています。厳しい意見も聞かれます。しかし、過日の予備校と提携した模擬試験では、本学は平均よりやや上の成績を収め、その意味ではこの半年の間に、学力や意識の向上が認められるようです。4月から就任された学長先生をはじめ、鹿島副学長、久保田教学部長の御努力の賜物と感謝している次第です。同時に、大学生活は国家試験のためだけにあるのではなく、大学祭やその他の分野でも充実した生活を送ってほしいと願っています。

学長・11月の模擬試験の結果では、本学は偏差値62%を越え、まずまずのレベルになっています。各科目別でも、臨床系の咬合・咀嚼がわずかに低い他は、すべて平均点以上を取り、参加した14校中では5番目の成績でした。

会長・国家試験のために予備校に協力を依頼しているという現状に対して、大学の教員の認識など

はいかがでしょうか。

学長・誤解のないように申し上げれば、大学は予備校に講義を依頼しているのではなく、あくまで父母会が独自に予備校に交渉・依頼し、大学は教室の使用を許可している、という形です。模擬試験は本来個人で受けるべきものですが、全体で受ければ安くなることもあって、理事長の寛大なお計らいもあり、大学の負担でこの模擬試験を受けることが出来るようになりました。また、予備校の講師が大学で補講を行うことについては、はじめ抵抗を感じる方もあったかも知れませんが、国家試験に合格するという目的達成のため、従来我々に不足していた部分は謙虚に学ぶ、という立場で良いのではと考えています。

司会・予備校の講師を学校に入れるのは問題ないと思えますが、では何故、大学で学ぶだけでは国家試験合格に不十分なのか、という思いもします。外部からの応援と同時に、もっと同窓会も活用していただければ、と思うのですが。

学長・現場では、補講を通じて大学の先生方が、意識を変え、合格のための指導のノウハウを学んで頂いた点、結果的に学生さんにとっても好評だったと考えています。

会長・外部からの刺激は、結果的に意識改革には良かったでしょうね。

理事長・平成19年度から、教員のシステムががらりと変わります。教授、準教授、助教授という三つのセクションになり、講師などの位置付けがなくなる。従来からの教授を頂点としたピラミッドの構図は変わるでしょう。しかし、国家試験の科





目別の体制は変わらないので、科目別に教授をあてがわないと対応しきれないと思います。

父母会会長・国家試験の合格率が、従来と違い、75%と国で決められている。出来ても出来なくても、75%で切られてしまう。いわば、大学同士の競争、絶対評価から相対評価への変化、という点が問題です。現在、予備校と提携している17校のうち、本学が申し込んだのは17番目、他に麻布にある予備校は昭和大学と強固な関係を結んでいる。

(つまり本学は対応が遅い) また、予備校の模擬試験で、平均点クラスの学生は、本番でも合格ラインですが、それより下のクラス、下方の25人が非常に問題だそうです。教員に聞くと、下3分の1は授業についてこれないそうです。先日の授業参観で、久保田先生曰く、優秀な授業よりも分かりやすい授業を、と言っておられるそうです。勉強しない学生が悪いのか、授業が下手な教員が悪いのか、が良く分からないのです。

「学生の意識変化を」

理事長・東京歯科の例で申し訳ないが、以前は学生同士で勉強し合っていた。先輩からのノートを代々受け継いだり、茶を飲みながらでも学生同士が質問し合うような、学校全体に「気風」が在った。そのことが、高い合格率に直結していた気がします。そのような点を、本学学生にいかにつたえるか。そんな雰囲気をつくるか、が重要です。

会長・本学の学生も、学力自身は他校と比べて、それ程の遜色はないと思います。それが6年間の教育の中で、どう差が付くのか。同窓会が協力出来ることは在ると思いますし、例えば受験当日同

窓会から「合格弁当」などを出してみたい。成績優秀者には賞金を出すとか、卒業時の成績優秀者への同窓会賞などもいかがかと思えます。

理事長・それも結構ですが、本学の学生には「相互扶助」の誠心が希薄なように思うのです。たとえば優秀な学生が他の学生を指導する、とか。

会長・学生同士の関係が希薄なら、歯学大会の支援などもして、学生同士が触れ合う機会を作るのも一考かと存じます。

父母会会長・父母会もかつてクラブ活動への表彰などしていましたが、やはり国試の成績不振から、それが出来ない雰囲気になっている。また、学生同士のグループ学習については、本学でも現在そうなりつつあるようです。「ひとりにさせない」点が重要で、模試の好結果にも反映されている気がします。

学長・昨年初めに卒試対策委員から、学生にグループ学習を呼び掛けたところ、当初は拒否されたものが、徐々に意識が変わりつつ在るようです。過去2年間の国試の成績を踏まえて、現在の6年生はかなり国試を切実に感じていますから。

理事長・校風の育成は大切ですね。

司会・東京歯科出身者は、卒業後も連携し、勉強しつつ、伸びてゆく方が多いようで、校風の影響かと思われま。本学では、かつての集中学習などは仲間を作るのには最適のチャンスで、そのグループが卒業まで続いていました。学問的な効果はともかく、ともに励まし合い、学ぶ姿勢を共有するという点では、再考の余地もあるのではないかと。また、クラブ活動の低迷も深刻で、大学側がクラブ活動を強制するくらいの必要もあるのではないかと。余暇の中で、「縦の社会」が形成される利点は貴重だと思います。

父母会会長・話が戻りますが、下位3分の1の学生の扱いについて、先日伺ったのは、まずチューター制(正式にはチュートリアル・システム)。すなわちマンツーマンで教育する、ということですが。

学長・本来その制度は、学生の自学自習を、教員が手助けする、というシステムです。

父母会会長・また、さらに優秀な学生が他の学生

の面倒をみる、などの方策も、実際にどこまで学生の中で機能しているのか。不安に思います。

学長・授業を理解出来ない原因の一つは、まず気力不足。これに対して、同じように教育しても無理でしょう。少人数で、厳しく、問題をやらせる、という教育が必要でしょう。自主的に勉強を、というのは無理です。

会長・学生の性格の弱さが問題ですね。奨学金などで意識を変える、あるいは意識の高い学生を入学させる、なども一考では。

理事長・ロビンフッド・システムというものも面白いと思います。

「教員は大学院出身者を」

理事長・かつては各研究室を学生に開放し、放課後は学生が復習などしていた。そんな習慣も必要で、現在、大学院希望者が少ないのもやはり「馴染みがない」ことにも起因しているのでは。同じ釜の飯を食う、という感覚は大切です。その関係は卒業後もずっと続くのですから。いろいろな機会をとらえて、教員と学生同士が触れ合う中で、若いエネルギーを育てねばなりません。

司会・教員側にも、後輩を育てる意識が薄いと指摘もあります。時代的に、かつてのような名物教授、強烈な個性で人間的に大きな教授が少なくなっていますね。

学長・大学が大衆化している現在、かつての高等教育を担うのは大学院しかありません。ならば、教員の採用に際しても、大学院出身者しか採らない、というのも一考かと思います。大学院で学問



を学ぶとともに、教育能力についても養成された者が教室員として残る、というのが必要かと思います。また、私自身、体育会系の人間なので、クラブの効用は身をもって知っています。新入生に対する歯学概論の授業では、積極的にクラブ活動を奨励しています。

司会・クラブは単位制にしてもいいかな、とも思うくらいです（笑）。

「同窓会OBの登用の促進」

理事長・学ぶという点では、本学出身者にも、すでに歯科界において多彩な人材が輩出しています。

会長・過日、卒業生3人を招き、「総義歯サミット」を開催しましたが、同窓に大変好評でした。

理事長・広く人材を登用したいですね。ただ、実績のある同窓の開業医を、たとえば非常勤講師に迎える際に、まだ閉鎖的、排他的な雰囲気は一部にあるようです。本学のレベルを十分認識するなら、より高いものを求めるため、意識を変えてもらわねばなりません。指導者にはそのような器の大きさも必要です。

司会・研究論文の数も少なく、研究テーマの焦点もずれているように思いますが。

学長・教員を見ていると、もう少し他大学や同窓との交流や共同研究があってもいいかな、と感じています。

会長・視野の狭さ、了見の狭さ、言い換えれば、客観的な視点が不足している感は否めません。

理事長・私が日本解剖学会の百周年の会頭を勤めた時も、その客観的な評価の大きさが学内で理解されない、という現実がある。



会長・学内学会のレベルも低調です。年に1、2回、学内学会を移動例会にして、全国の同窓会と共同で開催したら、と提案しました。幸い賛同を得て、今年北海道で開催すべく、準備を進めています。同窓会からも、常に活性化の方策を模索しています。

父母会会長・本学では、従来から客観的な評価に対する反応が冷たいように思うのですが、もう少し、対外的な評価を意識すべきだと思います。それが励みにもなる訳です。

「斬新な人材の確保」

会長・教授選にしても、客観的に、外部からの人材を広く求める、オープンにする、ということも重要だと思います。

理事長・特に臨床系について、強く思いますね。

学長・前理事長は、臨床系は学内出身者で、というご意向をお持ちだったようですが、こういう時代ですので、看板になるような教授を求めても良いかと思います。

理事長・各大学で二番手にいる人物の中には、きわめて優れた人材も多い。

司会・やはり斬新な人材、考え方の導入は必要でしょうね。

「看護学科新設について」

司会・新設の看護学科について一言いただけますか。

理事長・一番始めに、歯科医師会の石渡会長を通じて、医師会の加藤会長から依頼を受けました。共済病院の看護学校の閉鎖に伴い、その後を引き

受けてもらえないか、と。今後の歯科医学は、従来以上に一般医学と一緒に活動する場面が増えてくる。そこに、歯科大学を出た看護師が進出するのは、おおいに意義のあることです。三浦半島を中心に、そうした人材を輩出するのは素晴らしいこと。臨床実習は共済病院が全面的に協力するということで、スタートしました。大きな希望を持っています。

会長・大変夢のある事業だと思います。一方、共済病院が手放したものを引き受ける以上、勝算はおありですか。

理事長・その点については十分議論しました。共済病院自前の看護師育成のため、先行投資したのに卒業後はそこから離れてしまうという現実と、病棟を拡大するという事情が重なったための措置としての閉鎖であり、決して負の遺産を引き受けた訳ではありません。

会長・個人的な話ですが、私の患者さんでその出身の看護師さんが、母校が形を変えて存続してくれることに感謝していました。

司会・全国的に見ても、財政上の理由から看護学校は廃止傾向にあるようです。同窓の中には、本学の経営がさらに苦しくなるのでは、という懸念の声も聞かれるのですが。

理事長・財政上は全く不安はありません。また一方で、看護学校が新設される傾向もあります。十分に勝算があります。

司会・横浜研修センターのことですが、紹介患者さんが多すぎて、対応が十分出来ない状況になっています。何とか人事も含めて、横須賀に代わる看板病院として、何か対策はないでしょうか。

理事長・30分に一人の予約状況を、たとえば15分にするなどの工夫も必要かと思います。開業医で困難な症例を扱う訳ですから、時間が掛かるのは無理もないとしても、初診の後はなるべく速やかに対応できるよう努力してほしいと思います。

司会・本日は貴重なお話を有り難うございました。本学の益々の発展を期して、大学及び同窓会が一丸となって頑張ってくださいと思います。

(了)